JA共済

JA共済 地域貢献活動

PROJECT STORY

農業のために
地域のために
明日のために
JA共済の
地域貢献活動

VOL.01

福岡県　JA糸島

［子ども食堂の活動支援］

令和4年12月

©2017 JA-KYOSAI

JA糸島
営農部 営農企画課 係長
岡﨑伸子さん

地域住民のよりどころとなる子ども食堂の運営を支えたい

食材提供と調理指導で「食育」と「多世代交流」の場を応援

**福岡県のJA糸島は、女性部が中心となって子ども食堂の活動を支援しています。
組合員や市民から直売所で販売できなかった農産物や家庭で余った食品を集め子ども食堂に提供。
合わせて女性部による調理指導のボランティアや不足物資の提供を行っています。
この取組みは資金難で活動継続をあきらめかけていた子ども食堂を救い、
地域の人たちの大切な交流の場を守ることにつながりました。
JA共済連は「地域・農業活性化積立金」を活用してこの取組みを支え、
地域のニーズにきめ細やかに対応できる支援活動の実現を後押ししています。**

「コロナ禍で女性部は休止状態に」今できることの模索が始まる

福岡県の北西部に位置する糸島地域では、温暖な気候のもと、水稲や野菜、果樹など多種多様な農産物が生産されています。JA糸島は「地域社会と共生し、地域に信頼されるJAであり続けること」を理念に掲げ、地域住民の豊かな暮らしの実現に取り組んできました。

なかでも女性部は、学校給食や地元の直売所に出荷する味噌を作ったり、地域住民に糸島の農産物や家庭料理を紹介するイベントを開催したりと、農と食を通じた地域とのつながり作りに力を入れてきました。ところがコロナ禍によって、状況は一変します。

「感染拡大防止のため、女性部員や地域の人たちが触れ合う場を作れなくなってしまったんです。会えない、集まれない、話せない。女性部として何もできなくなってしまいました」

JA糸島営農企画課で女性部を担当する岡﨑伸子さんは、当時をこう振り返ります。

「このままじゃいかんよね」

危機感を抱いた岡﨑さんたち担当職員や女性部役員は、コロナ禍の中でもできることを模索し始めます。そんな時、JAグループの家庭雑誌『家の光』で目にしたのが、フードバンクや子ども食堂の事例を紹介する記事でした。組合員から余っている食品を無償提供してもらい、助けを必要とする人たちに届ける。これなら私たちにもできるかもしれない――。

こうしてJA糸島による子ども食堂支援の取組みが動き出しました。

「もうやめてしまおうか」消えかけていた子ども食堂

岡﨑さんたちはまず現場を知るため、市内で活動するフードバンクや子ども食堂を見学して回ります。その一つが「いとしまこども食堂ほっこり」（以下、「ほっこり」）でした。

平成28年に子どもたちの食育を目的として始まった「ほっこり」は、地元の中高生や大学生が料理を作り、地域の人が食べに来る場所として、現在は月に1度開催されています。またコロナ禍で収入が減った人のために食料を無償配布するなど、子どもから高齢者まであらゆる地域住民を受け入れ、多世代交流の場として親しまれてきました。

しかし岡﨑さんたちから「見学したい」と連絡を受けた時、「ほっこり」は存続の危機に直面していました。子ども食堂を対象とした自治体の助成金はなく、大人のみからもらう1食３００円のわずかな売上と寄付を頼りに運営を続けてきましたが、「もはや資金が追いつかなくなり、実はコロナを理由にもうやめてしまおうかと考えていたんです」と代表の笹渕隆広さんは打ち明けます。

「ほっこり」は様々な体験を通じた学びの場にもなっています

「食材調達に困っていた私たちにとってJAは救世主です」と語る笹渕さん

現状を聞いた岡﨑さんたちは、「ほっこり」に足を運びます。そこで見たのは、想像とは異なる子ども食堂のあり方でした。

「子ども食堂は生活に困っている人が利用する場所というイメージがありましたが、『ほっこり』では幅広い世代や立場の人が一緒に料理や食事をしながら交流を深めていた。ここは地域の皆さんにとって大切なよりどころなのだと実感しました」と岡﨑さんは語ります。

JA共済の地域・農業活性化積立金が資金面を支える強い味方に

同時に、資金面の厳しさも目の当たりにします。「ほっこり」では毎回、おにぎりと味噌汁を提供していますが、味噌汁の具は豆腐などが少量入っているだけ。「糸島は豊かな野菜が採れる土地なのに、それを料理に使えないなんて」と岡﨑さんたちは愕然とします。調理していた大学生たちが、糸島の農産物について何も知らないことにも驚かされました。

JAなら旬の野菜を提供できるし、食育に取り組んできた女性部なら農産物や家庭料理について教えることもできる。これこそ自分たちにしかできない活動だと確信した岡﨑さんは、笹渕さんにこう伝えました。

「野菜や米はJAが提供するから、やめんでいいよ。一緒に子ども食堂を続けましょう」

こうして令和3年10月から、JA糸島による「ほっこり」への食材提供と調理指導がスタートしました。食材提供の呼びかけは、JA糸島の産直市場「伊都菜彩」やAコープ、JA糸島女性部が活動拠点とする「食育研修センターいきいき」にチラシを掲示。家庭で消費しきれない食材や産直市場で販売できなかった野菜を、JAの各支店や伊都菜彩などに設置した支援ボックスに提供してもらう仕組みです。

ただ実際に支援を始めてみると、野菜や米以外に、調味料なども不足していることがわかりました。しかし買い足したくても、女性部の予算は金額も用途も限られます。

そこで強力なバックアップとなったのが、JA共済連でした。地域活性化や農業振興・農業経営安定化への支援を目的に創設された「地域・農業活性化積立金」を活用し、JA糸島の活動支援が始まったのです。JA共済連福岡県本部で地域貢献活動を担当する井手亮輔さんは、JA糸島の活動についてこう話します。

支援ボックスを通じて組合員や市民から提供された旬の農産物

「子ども食堂への支援は食材提供に限られる事例が多いのですが、JA糸島は調理指導も行い、地域住民とコミュニケーションを通じた食育活動を展開している意義のある活動だと感じました」

担当者の熱意が周囲を動かし 組織の壁を超えた協力体制を実現

JA共済連の支援を得て、女性部はよりきめ細やかな支援が可能になりました。現在は「ほっこり」以外にも、市内３カ所の子ども食堂に食材を提供。令和4年からは九州大学の寄宿舎で暮らす学生に食材を届けるフードパントリーも開始し、「ジュースもなかなか買えない」「実は生理用品を買う余裕がない」などの学生たちの声に応えられるようになりました。

一方で、支援活動の立ち上げには、資金面以外にもクリアすべき課題がありました。「一番大変だったのは、組合員に活動の意義を理解してもらうことでした」と岡﨑さんは話します。

「糸島には生活や食事に困っている人なんていないはず」「大学生ならアルバイトという選択肢もあるのではないか」「自分たちも農家の経営が大変なのに、人を助ける余裕なんてない」

女性部員からもそんな声が上がりました。しかし岡﨑さんたちは粘り強く説明を続けました。女性部だけでなく、青年部や生産部会、農政連など関係各所と会議を開き、「私たちが知らないだけで、糸島にも貧困はある」「食品ロス対策にもなる」と訴えました。

支援の輪が広がり食材だけでなく日用品など数多くのものを提供

その熱意が組織の壁を超えて多くの人を動かし、青年部や「伊都菜彩」の協力を得て、産直市場に出荷する生産者が販売できなかった野菜を提供できるようにJA内部で調整。調理指導のボランティアに手を上げる女性部員も増え、支援の仕組みが回り始めました。

活動が参加者の口コミなどを通じて浸透するにつれて、その他の組合員や市民からの食材提供も増え、現在では多くの野菜や米が持ち込まれます。令和3年10月から1年間で、「ほっこり」や九州大生に提供した食材は、米2064kg、野菜2824kg、その他食品164kgに上りました。

ＪＡ共済連の井手さんも「貧困や食品ロスなどの課題を発見できたのは、地域に密着した活動を行っているＪＡだからこそ。共済事業における『３Q訪問活動』も地域に暮らす方々とのつながりを強化するきっかけになっています。課題があると分かっても、なかなか行動に移せないものですが、強い意志で実行したのが素晴らしい」とＪＡ糸島の活動に共感を寄せます。「皆で少しずつ課題を持ち寄り、解決に向けて取組んでいくところは、『助け合い』を事業理念とするＪＡ共済の使命とも重なります」

農や食を通じた支援が JAグループのファン作りに

令和4年10月16日。今日は月に1度の「ほっこり」開催日です。

「じゃあ、次は白菜を入れて」「もう少し味噌を加えたほうがいいかな」

女性部員にアドバイスをもらいながら調理するボランティアの大学生たち。鍋の中には、糸島産の野菜がどっさり入っています。豚汁で使い切れない野菜は、天ぷらや煮物などの副菜に。JA糸島の支援で、今では野菜たっぷりのメニューを作れるようになりました。JA糸島理事で女性部員の吉丸豊子さんは、「私たちの活動が地産地消の大切さを若い人に伝え、糸島の農業や食文化を次世代に継承する一助になれば嬉しい」と話します。

「野菜を美味しそうに食べてくれる姿がとても嬉しい」と語る吉丸さん

昼時になると、料理を食べに来た利用者たちが続々と食堂に集まり始めました。「かぼちゃ、おいしい！」と笑顔を見せる小学生。２人の子どもを連れた女性は、「普段は子どもが他世代と関わる機会がないが、ここへ来ると皆さんが温かく接してくれる。私たち親子にとって大事な居場所です」と話してくれました。

子ども食堂をきっかけに、JAグループに親しみを持つ地域住民も増えています。大学生から「なぜJAが支援してくれるの？」と興味津々で質問されたり、食材提供のお礼を綴ったLINEのメッセージが送られてきたりと、女性部員たちがJAへの感謝の言葉を聞く機会が多くなりました。また大学生が女性部員と一緒に農業体験をしたり、家庭菜園を始めたりと、農業に関心を持つ若い世代も増加しています。食堂の利用者からは「伊都菜彩やAコープで糸島産の野菜を買いました」「JAの自動車共済に興味を持って相談に行きました」といった嬉しい声も届いています。

この活動を下支えしてきたJA共済連の井手さんも「子ども食堂の活動支援は、JAグループのファン作りに確実につながっている。私たちもJA糸島の活動を継続的に支えていきたい。今後もJA糸島と連携して現場の課題に寄り添い、解決に向けて取り組むとともに、他地区にもこの事例を紹介し、同様の取組みを県内に広める手助けをしたい」と展望を語ります。岡﨑さんも「JA共済連の協力がなかったら、私たちもここまで頑張ろうとは思えなかった。JAグループで連携し、共に地域に貢献できることを嬉しく思います。今後は地域の方々も参加できるボランティア部を新たに立ち上げるなど、食を通じた多世代交流の場を提供して、人と人のつながりをより一層広げていきたい」と語りました。

これからもJAとJA共済連が力を合わせ、子ども食堂の運営を応援していきます。

共に子ども食堂を支える
岡﨑さん（左）と井手さん（右）

取材協力者のご紹介

JA糸島
営農部
営農企画課 係長
岡﨑伸子さん

［経歴］

平成2年　JA糸島 入組 可也支所
平成12年　JA糸島 福吉支店
平成13年　JA糸島 深江支店
平成17年　JA糸島 西部支店
平成23年　JA糸島 生活部 生活課
平成25年　JA糸島 営農部 営農企画課

［地元の好きなところ］

山や海など自然の豊かな恵みを受け、最高の食を楽しめます。
地域住民同士がみんな顔見知りで結びつきが強いのも魅力です。

［この活動を通じて自分が感じたこと］

地域の中に貧困の問題があること、JAや農業について知らない人が多いことなど、多くの課題があることに驚かされました。

［休日の過ごし方］

夫と二人でよく佐賀県へ旅行します。土地の農産物を味わったり、温泉に入ったりと、いつも楽しい時間を過ごしています。

JA共済連福岡県本部担当者のご紹介

JA共済連
福岡県本部 普及部
普及総合グループ
井手亮輔さん

［経歴］

平成23年　入会
　　自動車部県南サービスセンター配属
平成26年　自動車部県央サービスセンター配属
平成28年　福岡県南支所配属
令和3年　普及部普及総合G配属

「JA糸島・子ども食堂の活動支援」の概要

活動の背景と課題

- コロナ禍で女性部の活動が休止し、部員同士や地域住民との関係の希薄化を懸念。
- 新たな活動の場を創出し、地域のつながりを再び強化することが求められた。

活動の内容

- 地域住民にとって交流の場である子ども食堂を支援するため、令和3年より組合員や市民から食材の提供を募る活動を開始。
- 家庭で使い切れない食材のほか、JA他部門や関係各所と協議・調整のうえ、産直市場で当日販売できなかった野菜を提供できる仕組みを構築。集まった食材は計4カ所の子ども食堂や九州大学寄宿舎に提供。
- 子ども食堂のうち1カ所では女性部が調理指導も実施し、糸島の農業や農産物について子どもたちに食農教育活動を行う。組合員からの提供だけでは足りない調味料や日用品の購入は、JA共済連の「地域・農業活性化積立金」を活用。

活動の成果

- 令和3年10月から1年間で、子ども食堂や九州大生に対し米2064kg、野菜2824kg、その他食品164kgを提供。
- 食品ロス削減や貧困支援につながっただけでなく、地元農業やJAグループへの理解促進、JAファンづくりにもつながっている。

活動のポイント

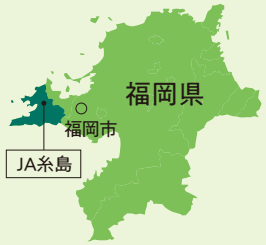
1. JA・女性部と地域のボランティア団体との連携・綿密なコミュニケーション
2. 農家・組合員・地域住民を巻き込んだ裾野の広い取組み
3. JA経営層の理解・協力、他部門を巻き込んだ取組み

［福岡県 JA糸島］

JA糸島は、昭和37年11月に糸島郡内の14農協と2連合会の合併により発足。設立以来、生産農協を標榜し、農業の生産性と生活福祉の向上に一貫して取り組んでいます。
また、糸島地域は対馬暖流の影響により、夏・冬ともに気温が和らぐ温暖な気候が特徴です。そのため野菜、果樹、花卉などの園芸作物の栽培に適しており、年間を通じて多種多様な農産物の生産が営まれています。

〈 JA糸島　概況 〉

- 組合員数　16,888名（うち正組合員5,429名）令和4年3月末
- 職員数　340名（うち正職員205名）
- 主な農産物　米・麦・大豆・ブロッコリー・トマト・きゅうり・いちご・キャベツ・柑橘他



「JA共済 地域貢献活動 PROJECT STORY」は
今後シリーズとして発行を予定しています。
同取組みを動画で紹介している
「一緒に地域を咲かせよう」もぜひご覧ください。

県ごとの地域貢献活動を動画で紹介
「一緒に地域を咲かせよう」

JA共済　咲かせよう　検索

▶ https://social.ja-kyosai.or.jp/prefecture_case/

編集後記

日本全国で地域貢献活動に取り組まれているJA役職員、共済連職員の皆さまの頑張りにスポットライトを当てていきたいと思っています。ご感想や取材のご要望などございましたらお気軽にご連絡ください。（西川・鈴木）

発行：JA共済連 全国本部 農業・地域活動支援部